

# 「昭和の町」の 建物探訪



## はじめに ～「昭和の町」に残る古き良き建築を訪ねて～

豊後高田市の中心市街地である「昭和の町」は、江戸時代から昭和30年代にかけて、交通の要衝・農産物の集散地として、国東半島随一のにぎやかな街として栄えました。「昭和の町」に残る歴史的建造物の数々は、当時の名残を今に伝えています。

### ■近世—「昭和の町」の成り立ち

「昭和の町」は、江戸時代の肥前島原藩の陣屋町を起源としています。1669年（寛文9）に高田は、隣接する豊前国宇佐郡の一部を合わせて島原藩・深溝松平氏の領地となりました。島原から遠く離れたこれらの飛地を「豊州領」と呼び、その支配のための役所（高田陣屋・高田御役所）が高田城跡に置かれました。また、桂川河口には島原藩の米蔵が置かれました。豊州領の年貢米はここに集荷され、瀬戸内海を通じて大阪に送られていました。こうして高田は、豊州領の政治・経済の中心地として賑わいました。

次頁の絵図は、江戸時代中期の高田の町を描いたものです。桂川を挟んで北側が玉津（当時は芝崎とも呼称）地区で、高田陣屋とその役人の官舎などが並ん

### ■豊州領とは？

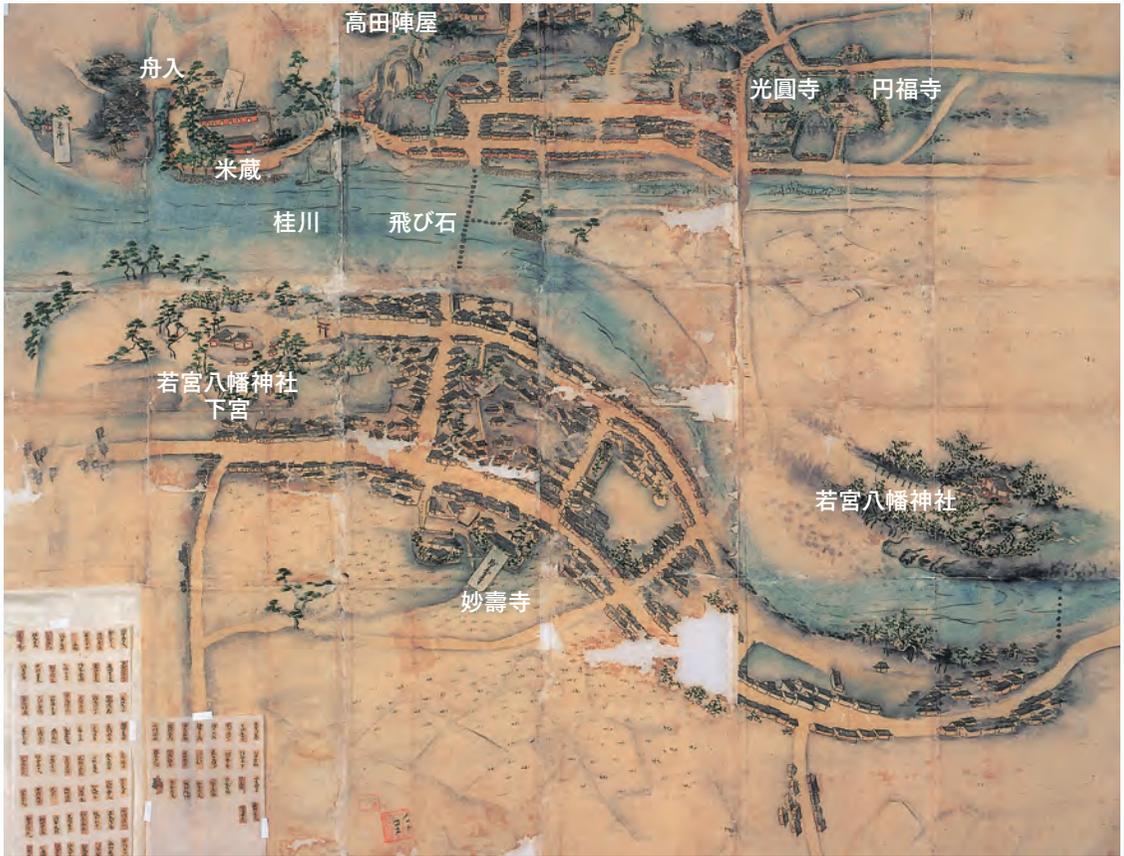
肥前島原藩の石高6万5900石のうち、2万7500石（豊前国宇佐郡の内で1万3500石と、高田が所在する豊後国国東郡の内で1万4000石の合算）は、「豊州領」と呼ばれる飛地でした。藩の総石高の4割を占める豊州領は、島原本藩にとって経済的にも重要であったほか、瀬戸内海に面した良港を抱えた海上交通の拠点としても大きな役割を担っていました。

### ■高田城とは？

桂陽小学校や中央公民館を中心とした付近の、桂川右岸の台地上に築かれた中世城館です。現在でも、豊臣政権期に竹中重利によって整備された水堀や土塁といった遺構が、比較的良好に残っています。1661年（寛文元）頃に廃城されたと考えられていますが、1669年（寛文9）から島原藩松平氏によって城跡の一部（本丸）が、高田陣屋として利用されました。



高田陣屋跡の石垣と石段



若宮八幡周辺之図／江戸時代中期(天明年間:1781~1789)／島原図書館松平文庫所蔵  
豊後高田市(1998)『豊後高田市史 通史編』より加筆

でいました。南側の高田地区は、若宮八幡神社下宮から延びる通りと、宇佐・中津方面から続く街道沿いに町並みが形成されていきました。通りの両側には瓦葺<sup>かわらぶき</sup>の町家がびっしりと立ち並んでいるように描かれています。また、玉津・高田両地区をつなぐ橋はありませんでした。飛び石伝いに桂川を渡り、満潮などで川の水量が多い時は渡船で通行していたといえます。

現在では周辺に市街地が広がりましたが、中心部については町の形状や道路の配置などが江戸時代からほぼ変わっていないことが読み取れます。

## ■近代—発展する「昭和の町」

玉津と高田両地区は1907年(明治40)に合併して「高田町」となりました。明治を経て大正時代に入っても高田の産業の中心は農業でしたが、次第に商工業も発展していきました。製糸業を中心に<sup>いもの</sup> 鑄物業、<sup>じょうぞう</sup> 醸造業、<sup>もくろ</sup> 製材業や木蠟製造などが代表的な産業でした。商工業の発展に伴って、これらへの資金融資のために

共立高田銀行、共同野村銀行といった地場資本の銀行が設立されました。とりわけ、共同野村銀行を設立した野村氏は、呉服の商いから日清戦争(1894年～95年)後の物価高騰こうとうで財を成し、大分県内屈指の大地主となったことでも知られます。「野村財閥」と呼ばれるほどの豊富な資金力は、高田の産業振興や近代化に大きく貢献しました。

一方、交通網の発達に目を転じると、1916年(大正5)に豊後高田⇄宇佐八幡間8.8kmを結ぶ宇佐参宮鉄道が開通したことで、人や物の流れが大きく変化しました。野村財閥は豊後高田駅の隣に小作米を収蔵する大規模な倉庫(現在：昭和ロマン蔵)を建設し、鉄道貨物で米を大量に輸送しました。また、豊後高田駅からは国東半島各地へとバス路線が延びており、交通結節点の役割を果たしていました。

豊後高田駅前から続く中心商店街は、必然的に国東半島各地から人々が集まる商業拠点となり、「おまち」と呼ばれて大いに栄えました。

## ■現代—再生する「昭和の町」

昭和30年代以降、豊後高田市の人口は減少に転じ、1965年(昭和40)には宇佐参宮鉄道がモータリゼーションの進展により廃線となったことなどから、中心商店街も徐々に往時の賑わいを失っていきました。

平成時代に入り、中心商店街の活性化が模索される中、2000年度(平成12)に行った「商店街まちなみ実態調査」で、商店街の建物の多くが昭和30年代以前に建てられていたことが分かりました。これを契機に「昭和30年代」をテーマとし



宇佐参宮鉄道・豊後高田駅前のようす／昭和前期  
(現在：豊後高田バスターミナル)



高田商店街の賑わいのようす／昭和前期  
(現在：中央通り商店街)



「昭和の町」の主な歴史的建造物マップ

たまちづくりが始まりました。当時の面影が残る町並みの修景や、各店舗に代々伝わる懐かしい道具の展示、昭和らしい商品の販売などの取り組みが功を奏し、現在では年間約40万人もの観光客が訪れる「昭和の町」として賑わいを取り戻しています。

先に触れた野村財閥の倉庫や、銀行建築などの歴史的建造物は、今日、文化財として登録されているほか、店舗や資料館・ギャラリーなどに活用されており、「昭和の町」の魅力向上の一翼を担っています。

今回、「昭和の町」に残る歴史的建造物を取り上げて解説した小冊子『「昭和の町」の建物探訪～ぶんごたかだ文化財ライブラリー Vol.6～』を作成しました。本冊子が、「昭和の町」散策や文化財鑑賞の手引きとして、また、豊後高田市の歴史文化を知る一助としてご活用頂ければ幸いです。

豊後高田市教育委員会

旧高田農業倉庫は、明治時代後期～昭和時代前期にかけて大分県内屈指の大地主であった野村家が、小作米を収蔵するために整備した米蔵群です。野村家が貸し付けた農地は、大分県北部の西国東・宇佐・下毛<sup>しもげ</sup>3郡にまたがる360町歩、納められた小作米は年間1万俵にもなったと伝わっています。

大量の米俵を輸送するため、宇佐参宮鉄道の豊後高田駅に隣接する敷地に、1937年(昭和12)頃に北蔵・北小蔵・東蔵・南蔵の4棟が建てられました。大規模な米蔵が軒を寄せ合う景観に往時の繁栄<sup>しの</sup>ぶりが偲ばれます。

米蔵群は、2000年(平成12)に豊後高田市の所有となり、「昭和の町」のまちづくりのなかで、拠点施設「昭和ロマン蔵」として整備されて現在にいたっています。また、南蔵を除く3棟が、2010年(平成22)4月に国登録有形文化財に登録されました。



旧高田農業倉庫(現・昭和ロマン蔵)  
正面奥の倉庫が「東蔵」、左手の倉庫が「北蔵」



旧高田農業倉庫東蔵 内部  
現在は「駄菓子屋の夢博物館」として公開中

## ■登録有形文化財とは？

国宝や重要文化財など、国や自治体が「指定」する文化財保護の制度とは別に、所有者が自ら申請することで「登録」される文化財の制度にしたがって定められた有形の文化財のことです。1996年(平成8)の文化財保護法改正によって創設された保護制度の一つで、建造物については築50年を経過した歴史的建造物のうち、一定の評価を得たものを文化財として登録し、緩やかな規制を通じて保存が図られ、活用が促されています。現在まで全国で1万件を超える建造物が登録されています。



登録有形文化財の登録証(プレート)

## ■旧高田農業倉庫北蔵

敷地北部に南面して建っています。桁行46m、梁間11mの土蔵造平屋建で、南面の全面に奥行3.6mの<sup>げや</sup>下屋を張り出しています。妻面には「高田農業倉庫」の<sup>こて</sup>鰻文字をあしらっています。

## ■旧高田農業倉庫北小蔵

北蔵の東北方に位置します。桁行12m、梁間7.7mで、東面の屋根を半切妻、<sup>きりづま</sup>西面を切妻造とする土蔵造平屋建です。北蔵や東蔵と同じ仕様をとりながら、小規模で屋根形式を違って、景観に変化を与えています。

## ■旧高田農業倉庫東蔵

敷地東側に西面して建っています。桁行40m、梁間12mの土蔵造平屋建、屋根は寄棟造です。西側に奥行4.3mの下屋を張り出しています。中に入って見上げると、クイーンポストトラスの小屋組が確認できます。



旧高田農業倉庫北蔵の妻面にある「高田農業倉庫」の鰻文字  
左官職人が漆喰を用いて「鰻」で仕上げた装飾



金属板で開閉する円形の通気口  
北蔵・北小蔵・東蔵の壁の下端に共通して見られる設備

## ■クイーンポストトラスとは？

トラス構造の形状の1つ。中央に<sup>しんづか</sup>真束とよばれる支柱の立っていない形式で、代わりに<sup>ついつか</sup>対束とよばれる2本の束を持った形式をいいます。近代の倉庫建築の構造によく利用されています。



旧高田農業倉庫東蔵(現・駄菓子屋の夢博物館)  
クイーンポストトラスの小屋組

## Column(コラム) ～宇佐参宮鉄道について～

1910年(明治43)の軽便鉄道法の公布後、全国各地で軽便鉄道の建設ラッシュが起きました。大分県内でも宇佐参宮鉄道のほか、各鉄道会社が相次いで軽便鉄道の路線を開業させています。各社の路線は、幹線鉄道から枝分かれして地域の奥深くまで路線を延ばしていき、地域社会の近代化に大きな役割を果たしました。



大分県内の軽便鉄道 路線図

1916年(大正5)3月に開業した宇佐参宮鉄道は、豊後高田駅から宇佐駅を經由して宇佐八幡駅に至る全長8.8kmの路線でした。豊後高田と宇佐間に封戸駅が、宇佐と宇佐八幡間に橋津駅、宇佐高校前駅という中間駅が置かれていました。参宮鉄道の開業によって、人や物の流れは大きく変わりました。通勤・通学の足はもとより、宇佐神宮への参拝客輸送も旅客収入の大きな柱でした。貨物輸送についても宇佐駅を中継して、北九州や大分・別府方面との間で盛んに行われるようになりました。

開業後は好調な業績を背景に、豊後高田から真玉まで路線を延ばす計画や、宇佐八幡から日出生鉄道の拝田駅まで延伸する計画などもあったようですが、実現には至



豊後高田駅に降り立つ乗客/昭和前期  
豊後高田市(1998)『豊後高田市史 通史編』より

りませんでした。その後、1945年(昭和20)に戦時統合により、県下の鉄道・バス会社と共に大分交通に統合され、「大分交通宇佐参宮線」となりました。戦後も営業を続けましたが、道路改修やマイカーの普及を受けて、1965年(昭和40)に宇佐参宮線は廃線となりました。

### ■軽便鉄道とは？

鉄道のうち、標準的なものより規格を低く(軽量のレール、幅の狭い線路、それに伴う小型の車両など)して建設された鉄道のこと。一般に輸送力や最高速度は低くなりますが、建設費を安く抑えることができます。

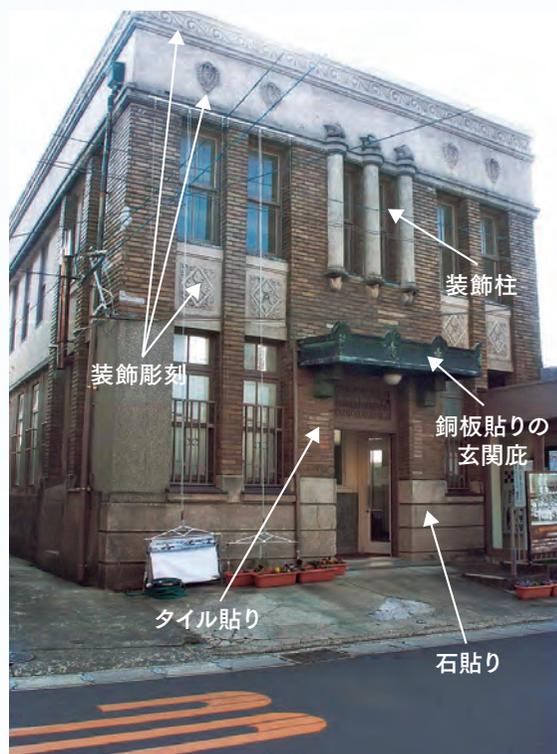
共同野村銀行は、先に触れた「野村財閥」の初代・野村礼次郎<sup>のむら れいじろう</sup>によって1912年(明治45)に設立されました。第1次世界大戦による好景気を背景に、共同野村銀行は盛んに産業界に資金を供給しました。とりわけ、1917年(大正6)の豊中製糸高田分工場の開設をはじめ、養蚕<sup>ようさん</sup>・製糸業など地域経済の振興に大きな役割を果たしました。

現存する旧共同野村銀行社屋は、昭和前期に現在の場所に建設され、2009年(平成21)8月に国登録有形文化財に登録されました。

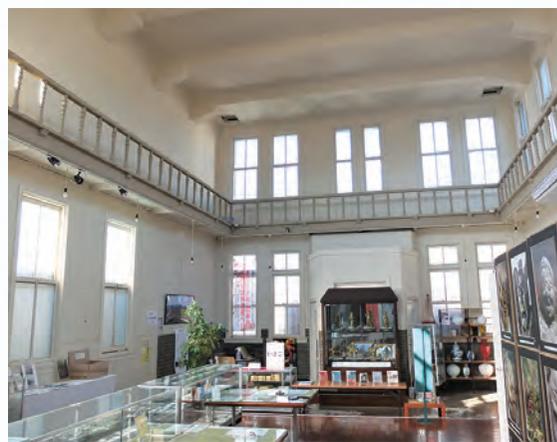
写真からは堅牢<sup>けんろう</sup>そうな外観に見えますが、構造は木造平屋建てで、屋根は瓦葺です。建物の奥にコンクリート造の金庫室が付属します。外観は腰壁部分を石貼りとし、タイル貼りで柱型をあらわしています。玄関<sup>ひさし</sup>庇は装飾をあしらった銅板貼り、その上部に3本の装飾柱を飾ります。他にも胴部やパラペット部分にも細かな装飾彫刻が施されており、優れた姿形をみせています。

中に入ると、吹き抜けにした自然光あふれる大きな空間が広がります。等間隔に並んだ縦型窓と、周囲にはキャットウォークが巡っており、近代の銀行建築の面影をよくとどめています。

建物は現在、大分石油株式会社が所有する「清照別館<sup>せいしょう</sup>」として、広く一般に公開・活用されています。館内では、元・銀行建築であったことにちなみ、近現代の珍しい貨幣・紙幣などが数多く展示されています。



旧共同野村銀行社屋(現・清照別館)



旧共同野村銀行社屋 内部

この建物は、旧大分合同銀行(現・大分銀行)高田支店として1933年(昭和8)9月に建てられました。建物は、同銀行の新支店が出来て移転した後、1962年(昭和37)からは高田信用組合本店が入居。2002年(平成14)に合併によって大分県信用組合高田中央支店に改称され、2004年(平成16)まで金融機関の店舗として使用されました。その後、2005年(平成17)に豊後高田市の所有となり、現在は「昭和の町展示館」として公開・活用されています。

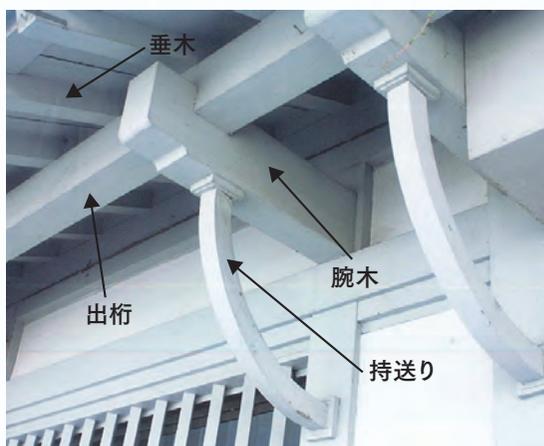
通りに面した建物は、伝統的な町家風の外観です。正面は白漆喰仕上げで、腰壁は石貼りとしています。屋根は瓦葺で、出桁造にすることで軒を深くしています。特に、下屋の出桁の持送りには洋風の意匠が見て取れます。

外観からは2階建てのように見えますが、内部は吹き抜けとなっています。格子模様装飾された天井や、採光用に設けた半円窓の意匠は軽やかで、モダンな印象を受けます。奥には金庫室が残っており、この建物が元銀行であった名残を感じさせます。

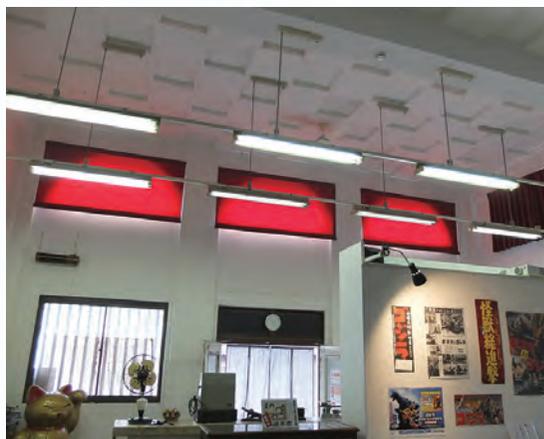
伝統的な意匠を基調としつつ、洋風意匠を積極的に取り入れた個性的な銀行建築として2010年(平成22)4月には、国登録有形文化財に登録されました。



旧大分合同銀行社屋(現・昭和の町展示館)



出桁造 出桁を支える腕木と持送り



旧大分合同銀行社屋 内部

# 旧共立高田銀行社屋

・文化財指定  
[未指定]

・建築年代  
【大正時代／1921年(大正10)】

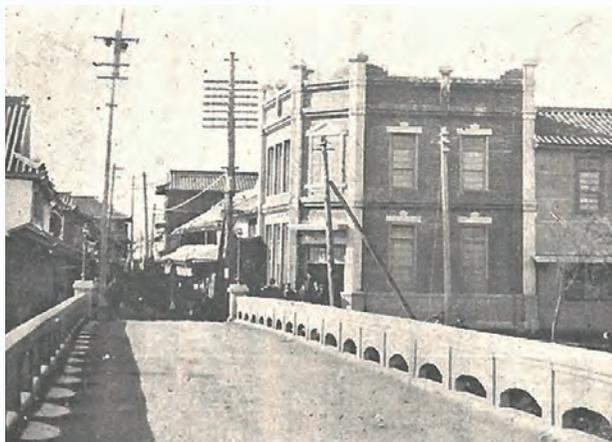
共立高田銀行は1894年(明治27)に開業した、豊後高田では地場資本による初めての銀行で、主に地元商工業への融資を担っていました。現存する建物は、1921年(大正10)に竣工しました。<sup>かつらばし</sup>桂橋のもとに立ち、地元では「赤レンガ」の愛称で長い間親しまれてきました。1929年(昭和4)に共立高田銀行が解散後、建物は所有者が入替わり、補強・改変を受けながら様々な利用がなされてきました。現在は、店舗に改装されて「アルフォンソ」というパン屋さんとして生まれ変わっています。

建物は鉄骨構造レンガ造の2階建、形は約8m四方の四角形ですが、交差点に面した角を斜めに切り取り、そこに出入口を配したシンプルな造りです。外観は一見して左右対

称な構成かと思いきや、1・2階に設けた縦型窓は、北東側に2個ずつ、南東側に3個ずつとアンバランスに配置されています。赤レンガ貼りの外壁の中で、モルタル塗り仕上げした柱や、窓上枠の白さが外観のアクセントとなっています。



旧共立高田銀行社屋(現・アルフォンソ)



竣工間もない共立高田銀行社屋と桂橋／大正時代  
豊後高田市(1998)『豊後高田市史 通史編』より

## ■レンガの積み方

旧共立高田銀行社屋の外壁のレンガは「イギリス積み」で積まれています。「イギリス積み」とは、レンガの長手(一辺が長い面)だけを並べた段と、小口(短い面)だけを並べた段を交互に積み上げる方法です。フランス積み(同じ段に長手と小口を交互に並べる方法)に比べて強度が強く、経済的な積み方であるといわれています。



旧共立高田銀行社屋の外壁

## Column(コラム) ～多彩な銀行建築が残る「昭和の町」～

「昭和の町」を散策していると、かつて銀行だった建物をよく見かけます。8～10頁までに紹介した3つの銀行建築に加えて、旧大分合同銀行社屋(現・昭和の町展示館)の向かいには、1961年(昭和36)に建てられた旧中津信用金庫社屋(現・KINKO)があります。

一括りに銀行建築といっても、色々な構造や意匠の建物がある事に気づかされます。【旧共同野村銀行社屋】は木造建築でありながら、外観は石貼りやタイル貼りを施して堅牢そうに見せている建物。一方、【旧大分合同銀行社屋】は木造で伝統的な和風の町家建築の中に、洋風の意匠が巧みに盛り込まれた「和洋折衷」的な趣の建物でした。また、【旧共立高田銀行社屋】は鉄骨構造レンガ造の、いかにも銀行建築らしい建物で、【旧中津信用金庫社屋】は戦後の鉄筋コンクリート造でシンプルなデザインの建物です。

このように、「昭和の町」の通り沿いに歴史的な銀行建築が並んでいるようすを、「近・現代銀行建築のストリートミュージアム(≒野外博物館)と呼ぶにふさわしい歴史的景観」と評価する向きもあります<sup>注)</sup>。

たしかに、大正時代～昭和中期(高度成長期)にかけて、各時代の個性的な造りの銀行建築がまとまって鑑賞できるのも、「昭和の町」の意外な魅力の1つと言えるでしょう。現地で色々と観察してみると、新たな「発見」があるかもしれません。

注)金谷俊樹(2009)「旧大分合同銀行社屋に関する所見」より登録有形文化財の意見具申時の提出資料の1つ



旧中津信用金庫社屋(現・KINKO)  
昭和中期/1961年(昭和36)



旧大分合同銀行社屋(現・昭和の町展示館)  
金庫室

かわらや ごふくてん

## 瓦屋呉服店

- ・文化財指定  
[未指定]
- ・建築年代  
【明治前期／1885年(明治18)】

瓦屋呉服店は1788年(天明8)に創業し、中央通り商店街で営業を続けている老舗の呉服店です。現在の建物は、1885年(明治18)に建てられたと伝わっています。高田の町の中で最も早く瓦葺を採用したことで、その珍しさから「瓦屋」という屋号が付いたとされています。間口が広く、格式ある店構えで、左隣には同様の造りの町家建築(釘屋金物店)が並んでいます。



瓦屋呉服店

左隣は「釘屋金物店」があり、格式ある構えの町家建築が並んでいる

1階正面が店舗部分で、内外装は改造されています。店舗の奥には中庭があり、これを中心に居室を配置する建物構成となっています。いわゆる「職住一体」の建物であるため、営業活動や生活スタイルの変化に応じた改装が各所に見られますが、「昭和の町」のかつての賑わいぶりをよく伝えています。

かめのや ごふくてん

## 亀乃屋呉服店

- ・文化財指定  
[未指定]
- ・建築年代  
【大正時代／1915年(大正4)】

亀乃屋呉服店は、中央通り商店街の交差点角に所在する木造3階建の建物で、1915年(大正4)に建てられました。元は旅館として使われていたそうです。

建物は多少の改変を受けていますが、「昭和の町」の往時の殷賑ぶりを今によく伝えています。当地に残る数少ない貴重な木造3階建の建物として、強い存在感を示しています。



亀乃屋呉服店



妙壽寺本堂 正面外観

妙壽寺本堂 内部  
高く張った格天井と市松模様の優れた意匠

妙壽寺は1531年(享禄4)頃に<sup>かなやきゆうき</sup>金谷休喜が開基し、1604年(慶長9)に「妙壽寺」の寺号を許された浄土真宗本願寺派の寺院です。境内には本堂を中心に、南側筋に<sup>きやうぞう</sup>経蔵、<sup>しやうろう</sup>鐘楼を配し、本堂正面から北東側の市道に向かって<sup>ちゆうもん</sup>中門、<sup>さんもん</sup>山門があります。

本堂は1902年(明治35)頃に建てられました。木造平屋建、屋根は入母屋造の本瓦葺です。<sup>ささき いわじろう</sup>帝室技芸員の佐々木岩次郎が設計したことが記録に残されています。平面構成は、真宗寺院本堂の典型的な形式を示しており、前方に<sup>げじん</sup>外陣、その奥に<sup>やらい</sup>矢来の間、さらにその奥に内陣と<sup>よま</sup>余間を配しています。内部も各所に彫刻が彫られ、市松模様の<sup>ごうてんじよう</sup>格天井など意匠に優れています。桁行と梁間がそれぞれ20mを超える壮大優美な本堂は、豊後高田市中心部のランドマークとして市民に親しまれています。

本堂のほか、江戸時代に建てられた経蔵、鐘楼、中門、山門をあわせた5件が、

### ■佐々木岩次郎とは？

佐々木岩次郎(1853～1936)は、京都府出身。明治～昭和初期にかけて活躍した建築家です。近代日本を代表する建築家・伊東忠太との関わりも深く、伊東と共に設計や監督(例:平安神宮・宮崎神宮など)、古社寺の調査活動などを行っています。妙壽寺には本堂建築に際して、佐々木が作図した設計図面65枚と関連資料2冊がまとまって残されています。これらの資料は建築史的にも貴重であることから、2019年(令和元)9月に豊後高田市指定有形文化財に指定されています。

佐々木が作図した設計図面(一部)  
(資料保存の観点から通常非公開)

2018年(平成30)3月に国登録有形文化財に登録されました。

### ■経蔵／建築年代：江戸中期

本堂の隣に建っており、妙壽寺の諸堂の中では、最も建築年代が古い建物とされます。内部には八角形の輪蔵<sup>りんぞう</sup>が置かれています。屋根の装飾や大壁に施された鍔絵<sup>つてえ</sup>など、特徴的な外観をみせています。



妙壽寺経蔵

### ■鐘楼／建築年代：江戸中期

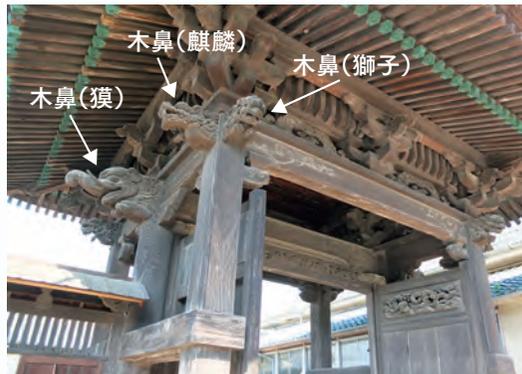
天井裏の墨書から、1761年(宝暦11)に建てられたことが明らかとなっています。内部の折上格天井や彫刻のつくりは優美で、独特の意匠をみせています。



妙壽寺鐘楼

### ■中門／建築年代：江戸末期

本堂と山門の中間に位置する規模の大きな四脚門で、彫刻の表現などから江戸時代末期の造立と考えられています。親柱には<sup>ばく</sup>猿、袖柱には<sup>しし</sup>獅子や<sup>きりん</sup>麒麟の<sup>きばな</sup>木鼻が取り付けられるなど意匠が凝らされています。



妙壽寺中門 内部見上げ

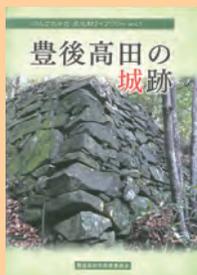
### ■山門／建築年代：江戸中期

敷地北東側の通りに面して建ち、妙壽寺の「表門」としての役割を持ちます。中門よりは小ぶりですが、古式をよく留め、風格あるたたずまいをみせています。



妙壽寺山門

## ■「ぶんごたかだ文化財ライブラリー」シリーズ



六郷満山文化に代表される神社仏閣、仏像、石造物、祭礼行事をはじめとして、貝塚、古墳、城跡、近代建築などなど…。

豊後高田市は、実に多様で数多くの文化財が所在する歴史・文化の薫る街です。

「ぶんごたかだ文化財ライブラリー」は、市内に所在する文化財をテーマごとに取り上げて、豊後高田市の歴史文化の魅力や特徴について、分かりやすく解説しているパンフレットです。

### 【バックナンバー】

- |                   |          |                             |
|-------------------|----------|-----------------------------|
| ○Vol.1『豊後高田の城跡』   | 平成30年度発行 | ※バックナンバーは豊後高田市ホームページ内で      |
| ○Vol.2『豊後高田の磨崖仏』  | 令和元年度発行  | データ公開中！                     |
| ○Vol.3『豊後高田の古墳』   | 令和2年度発行  | ※大分県電子書籍ポータルサイト《oita ebooks |
| ○Vol.4『豊後高田の仏像十選』 | 令和3年度発行  | (オオイタイブックス)》でも閲覧可能！         |
| ○Vol.5『豊後高田の国東塔』  | 令和4年度発行  |                             |

詳しくは

[ぶんごたかだ文化財ライブラリー](#)

検索



【参考文献】 大分県教育委員会(1994)『大分県の近代化遺産－近代化遺産総合調査報告－』大分県文化財調査報告第91輯／大分県教育委員会(2013)『大分県の近代和風建築－大分県近代和風建築総合調査報告書－』大分県文化財調査報告書第178集／清原芳治(2003)『写真集 郷愁のローカル鉄道宇佐参宮線 大正5年3月31日～昭和40年8月20日』大分合同新聞社／豊田寛三監修(2019)『写真アルバム 国東半島の昭和』樹林舎／豊後高田市(1998)『豊後高田市史こども版 豊後高田の歴史』／豊後高田市(1998)『豊後高田市史 通史編』／豊後高田市(2001)『緊急雇用商店街の街並みと修景に関する調査事業(商店街まちなみ実態調査)結果報告書』／豊後高田市(2013)『豊後高田市の文化財』／豊後高田市教育委員会(2016)『伝えたい！豊後高田の先人たち』／豊後高田市教育委員会(2019)『ぶんごたかだ文化財ライブラリー Vol.1 豊後高田の城跡』

ぶんごたかだ 文化財ライブラリー vol.6

### 『「昭和の町」の建物探訪』

発行：豊後高田市教育委員会文化財室  
〒872-1101 豊後高田市中真玉2144番地12  
TEL：0978-53-5112 / FAX：0978-53-4731  
E-mail：bunkazai@city.bungotakada.lg.jp

発行日：令和6年3月15日発行

印刷：有限会社 宗印刷所

表紙：旧共立高田銀行社屋